

尾崎一雄全集

第十卷

筑摩書房

尾崎一雄全集第十卷

昭和五十八年十一月三十日初版第一刷發行

著 者 尾 崎 一 雄

發 行 者 布 川 角 左 衛 門

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—九一

電話 東京(24)七六五二(營業)

振替 東京(24)六七一一(編集)

印刷 株式會社精興社

製本 株式會社鈴木製本所

落丁・亂丁本はお取替致します

目次

わが生活・わが文學

太宰君の場合……………	五
梅一輪……………	七
文學時感……………	二
村夫子……………	三
何のために誰のために書くか……………	三
下曾我放談 その一……………	三
下曾我放談 その二……………	四
清貧孤高に非ず……………	九
文學我觀……………	五
下曾我放談 その三……………	八
一私小説家の呟き……………	八
名聲……………	九
同人雜誌作家について……………	一〇
根岸にて……………	一〇

異議あり……………二七

日本文學の海外紹介……………二八

政治家のヅウヅウしさ……………三三

かくれたる鑛脈——創作斷想——……………三六

小説の映畫化……………四〇

古本回顧談……………四四

箸の上げ下ろし……………五八

氣の弱さ、強さ……………六二

世に出るまで……………六六

私と「新潮」……………七五

志賀先生のこと二つ……………八六

もぐら隨筆

秋の色……………八九

下曾我閑談……………九二

温泉の思ひ出	一七
碁のはなし——文人圍碁會を中心に——	二〇八
掘出したもの	二五

天狗の羽風

冬眠居日録

古木君のこと	三九
啓 蟄	四三
キリギリス・その他	四七
厭世・樂天	五一
五郎とボン	五七
伊東・熱海行・ボン	六一
梅千の漬方	六六
早慶戦・その他	七一
日 記	七五
碁・玉樟	八〇

淺沼君との往復書簡……………二八四

芥川賞の賞金……………二九〇

カツパの圖……………二九五

テツパウムシ……………三〇〇

早稻田敗る……………三〇四

にがわらひ……………三〇八

天狗の羽風……………三一五

冬眠居閑談

還曆の春……………三二七

孫と梅干……………三三〇

大氣の汚れ……………三三三

冬眠居隨想

わが看板……………三三八

うつり變り……………三四八

もののいのち……………三六〇

隨想

酒匂川の水	三七二
毛蟲の季節	三七三
ランドセル	三七五
暮、出てこい	三七六
授賞式の日	三七七
朴と一位の苗木	三七九
雁の列	三八〇
運といふこと	三八一
啓蟄のころ	三八三
盛夏抄 — 志賀先生の本のこと・その他 —	三八七
若き日のこと — 永井龍男に關して —	三九五
人間生活の地獄圖 — 「檜山節考」について感じたこと —	四〇一
志賀直哉の日記から	四〇六
文學と家庭の幸福	四一三
わが小説	四二二

實録・「風報」始末記	四二四
本とつきあふ法	四四二
短篇小説について	四四九
雪 佛 ―尾崎士郎の死を悼む―	四五三
早くも一年 ―尾崎士郎追憶―	四六一
河野一郎のこと	四六四
澤標忌	四六六
木山捷平を悼む	四六九
後 記	四七三

尾崎
一雄全集
第十卷

わが生活・わが文學

太宰君の場合

去年（昭和二十二年）の二月二十四日、薄暗くて停電中だったから多分六時頃か、太宰君が突然やつてきた。私は、二十一年四月一日から、毎日、その日の天候と、受信、発信、來客だけを、心憶えのため極めて簡単に記してゐるが、その日二十四日の條には、來客、太田女、太宰治（太田女に案内され夕方來、十時頃太田方へ歸る。明日伊豆長岡へ仕事しにゆくと。久しぶりにて一こん。吉原義彦より頼みの件話す。諾。）さうある。

太田女といふのは、太宰君の小説『斜陽』のモデルと云はれる人で、私共より一年ほど前に下曾我へ疎開して來てゐる。私の妻はいつか知り合ひになつてゐたやうだが、私はその時初対面で、どんな人かも知らなかつた。太宰君とどういふつづき合ひの人か勿論知らず、また知りたいとは思はなかつた。

太宰君の近況を一應きいてから、話は文學談風になつていった。私は彼が書いた織田作之助追憶文のことを云ひ出し、その終りの方に、「織田君、よくやつた」と書かれてゐるのに不賛成の意を表した。あんな出鱈目をやつて、まるで自爆したやうなものだ、といふ意味を云つた。すると太宰君は、「あれは僕のセンチメンタリズムですよ、可哀さうだったもんだから」と云つた。

太田女は間もなく、一人先に歸つてゆき、太宰君は酒が入るにつれて元氣になつて、いろいろ話し、

十時頃まで居た。丁度來合はせてゐた私の義弟が、太田方へ彼を送つていつた。

最近になつて、太田女から次のやうなことを聞いた。

「去年太宰とお伺ひしたとき、あなたが太宰のことを女性的（な作家、あるひは作風）と云はれましたが、あの時あなたの前ではそんなに反對しなかつたのに、うちへ歸つて來てからそのことを云ひ出して、僕は決して女性的ではない、男性的だ、とさかんに云ひました。そのときわたくしは、あなたの云はれる方がほんたうだと思ひましたし、今でもやはりさう思つて居ります」

それから、そのことといきなり關聯してではないが、「あの人（太宰君）は、いつでも、誰かしら側について（精神的に）ゐないと、書けない人のやうです、支柱のやうなものがいつも欲しかつた人のやうです」とも云つた。

實は私は、太宰君のことを、女性的な作家だとはかねて思つてゐたのだが、その時、それを云ひ出したことは、まるで忘れてゐた。最近太田女から聞かされても、自分がその時、どんな場合にどんなふうになつてそれを持ち出したのか、また、それに對する太宰君の應答がどんなものだつたか、すべて忘れて了つてゐて、そのかけらをも、憶ひ出すことは出来なかつた。だから多分、太田女が「そんなに反對しなかつた」と云ふ通り、太宰君は、その場では、軽く受け流してしまつたのであらう。若し、いやさうでない、と、あとで太田女に「さかんに云」つたやうな意氣込みで抗辯したのだつたら、私の印象に残らぬ筈はないと思ふ。

男性的、女性的、などといふ云ひ方は、大ざつばで、實際は入交り、錯綜してゐるのが普通だから、ある人をつかまへて、いきなりさう云ひ切つてしまふのは危険だが、志賀直哉、太宰治と並べた場合は、前者を男性的、後者を女性的と云つても大過無いだらう。

太宰君といふ人は、氣が弱くて、正面からは、他人の云ふことになかなか反對出來にくいたちのやうだつた。その場の調子を滑らかにしたいといふ氣持から、氣に入らぬことも強ひて抗辯はしない、なるべく相槌を打つ、時には、相手の氣に入るやうな誇張も云ひ、それが過ぎて嘘にもなる、——だから女性的だ、といふと、女性的といふことをひどく悪い意味にしてゐることになるが、何もためにしようとの惡意からさうなるのではなく、氣の弱い善人がとかく陥りがちな癖なので、女の人の方が、さういふことになり易い、といふほどの心である。

人前に於けるさういふ自己歪曲、強ひられた自己抑制の集積が思はぬ方向に噴き出すことにもなる。變なところに噴氣口を求める。それは、さうなるわけである。正面から、出したいときに出してゐれば、持つて廻つた出口を探す必要はないからだ。

逆説だの、反語だの、皮肉だのを必要とするのは、右のやうなたちの人に多いのではなからうか。素面ではおとなしくて、酒に酔ふと、莫迦に勇ましくなる、といふのも、さういふ人に多いのではないか。私は、太宰君の『如是我聞』を讀んで、氣の弱い人の、命をかけた激發だと思つた。ひどく氣の毒になり、あれを書く（口述にしろ何にしろ）ときの太宰君の胸中を思つて、實に暗い憂鬱を感じた。うしろ、とき詣りをする女の、しんいの炎に燃えるつり上つた眼を思つた。

あれは、書かれない方が好かつた、とつくづく思ふ。あれは、逆上した人間が、盲目滅法、刀を振り廻したやうなもので、相手にはカスリ傷一つ與へず、自分で勝手に血を流してゐるやうなものだ。まことに無殘である。

志賀直哉だつて、よもや神ではあるまい。突くべきスキを狙つて、文學論を展開すれば、必らずどこかに切りつけることは出來る筈だ、あいにく太宰君は、論は不得手のやうだが、志賀直哉だつて、何も